5/3・5 ゴールデンウイーク、各地でにぎわいを見せる

▲ちょっとおんさいまつり・光秀まつり（明智町）

▲根の上高原つつじ祭り（根の上高原）

▲ふくろうまつり（岩村町）

行楽日和だったゴールデンウイーク。各地でさまざまなイベントが開かれました。

新型コロナウイルス感染症の影響で、中止や規模縮小が続いており、盛大な開催は３年ぶり。気持ちの良い青空が広がったこともあり、祭りを楽しみにしていた人たちが大勢訪れ、各地でにぎわいを取り戻しました。

4/27 誰もが使いやすく、『バリアフリー・トイレ・ガイド』を出版

障がい者自立クラブえな　ぴあっぽと恵那南高等学校の生徒らが協力し、市内48施設に設置されているバリアフリートイレをまとめた冊子を出版しました。ぴあっぽの山田代表は「将来を担う高校生たちに、バリアフリートイレの重要性を知るきっかけになれば」と話しました。

5/11 道の駅に小型発電機が寄贈される

（一般）日本道路建設業協会中部支部から、道の駅上矢作ラ・フォーレ福寿の里、道の駅そばの郷らっせいみさと、道の駅おばあちゃん市・山岡の３カ所に小型発電機が寄贈されました。道の駅は防災拠点にもなっており、今後災害時などに活用されます。

5/20 SDGs未来都市と自治体SDGsモデル事業に選定

内閣府からＳＤＧｓ未来都市と、その中で特に優れた取組、自治体ＳＤＧｓモデル事業として選定されました。生活の基本である「たべる」ことに注目し、経済・社会・環境の課題解決を図っていくことを提案。野田聖子地方創生担当大臣から認定証が授与されました。

5/16 ホストタウンの縁、ポーランド支援募金の送金を報告

ウクライナを支援するポーランド共和国への寄付金が４月21日までに約785万円寄せられ、ポーランド赤十字社に送金されました。この日は発起人を代表して阿部伸一郎さんがポーランド大使館を訪れ送金を報告しました。寄付金の募集は、継続していきます。

輝く 恵那人

212人目

大井町銀座四丁目
杉本（すぎもと）　桂子（けいこ）さん（52歳）

□プロフィル

中山道大井宿に店を構え、切り盛りするかたわら、恵那の朴葉寿司プロジェクトの代表を務めている。リフレッシュ法は花を生けることと、ヨガで身体を動かすこと。

▲朴葉ずし作りにいそしむ杉本さん

おいしさを全国に
朴葉ずしを伝承していく

「朴葉（ほおば）ずしのおいしさを一人でも多くの人に知ってもらいたい」と話すのは、恵那の朴葉寿司プロジェクトの代表を務める杉本桂子さん。

新緑の美しい5月から6月、朴葉ずしは旬を迎える。朴葉ずしは県を代表する郷土料理で、飛騨地方南部から東濃・中濃地方、長野県木曽地方に伝わっている。県内では知られている朴葉ずしだが、県外では認知度が低い。「昔から地域に根付く大事な郷土料理。だからこそ、みんなに知ってもらいたい」。プロジェクトはそんな熱い思いを持った8人で活動している。

プロジェクトは、２０２０年５月に朴葉ずしの魅力を再発見しようと発足。昔からの味を伝承していくことや、地産地消、食育に取り組んでいる。メンバーには市内の飲食店や旅館、産地直売所グループの代表などがいる。メンバーが集まると朴葉ずしに関するアイデアは尽きず「やりたいことがたくさんあって時間が足りない」と杉本さんは笑顔を見せる。

昨年は新型コロナウイルス感染症の影響で販売イベントが中止になるなど、思うように活動ができなかった。そんな中、販売方法を工夫し各店舗で販売。朴葉ずしマップを作り、市内を巡ってもらうようにした。朴葉ずしを食べた人からは「いろいろな店の味を楽しむことができて良かった」と喜びの言葉をもらい、奔走してきた努力が報われた。

恵那の朴葉ずしは、もともと朴葉に白米を包み農作業や山仕事に持参していたものが、時代とともに華やかなおもてなし料理として進化した。このプロジェクトも発展途上。木の葉を使う料理の中で一番になるのがこれからの目標。「新緑の時期になると恵那に朴葉ずしを食べに行きたい」と言う人が増えて欲しい。杉本さんの瞳には希望の光が溢れていていた。